

異年齢保育に関する体系的研究の重要性

横松 友義 ・ 安達 保雄* ・ 伊勢 慎** ・ 永原慎太郎***

稲益かおり****

本稿では、異年齢の乳幼児たちを対象にする保育に関する体系的研究を行うための第一歩として、用語使用に関する提案と、先行研究論文・先行実践報告においてその種の保育を対象にしている理由についての分析と、その体系的研究の今日的意義に関する考察及び研究展望を行っている。用語については、積極的に実践を進めるという意味が込められた「異年齢保育」あるいは「異年齢児保育」を用いることを提案する。異年齢保育への関心の高まりは、現場の必要性とか、社会の条件整備とか、異年齢保育そのものへの洞察の深まりとか、保育研究の転換への志向性とかを背景に生じている。その体系的研究は、保育実践・保育研究に豊かな転換をもたらす上で重要であると考えられる。これから、方法論研究とそれを踏まえた実践研究と歴史研究とを本格的に推進する必要がある。

Keywords：異年齢保育，異年齢児保育，縦割り保育，混合保育，体系的研究

近年、異年齢の乳幼児たちを対象にする保育への関心が、大きく高まっている。この種の保育をここでは異年齢保育と呼ぶ。異年齢保育に関心をもつ理由としては、地域の子ども集団がなくなり、その教育機能が失われたことや、少子化に伴って異年齢の子どもたちを一つのクラスに編成する必要性が生じたことや、心の教育が重視されるようになったことなどがあげられている。中には、異年齢保育がこれからさらに重視されると予想する研究者もいる。例えば、塩路・佐々木は、次のように述べている。「少子化や地域の教育力の低下などが叫ばれる中で、幼稚園や保育所は子どもが異年齢で交流することができる重要な場となっている。」「今後の幼保一体化総合施設においては、いずれにせよ0歳児から5歳児までが共に生活する形態が主流になろう。」(塩路・佐々木 2005 p.103)

そこで、筆者らは、異年齢保育に関する先行研究・先行実践の資料を収集することにした。ただし、

どの程度まで収集できるかは不明のところである。なぜなら、保育所・幼稚園の実践報告書・研究報告書や学会・研究会の研究発表集内の資料などをすべて収集することは不可能と考えられるからである。そうしたことから、本稿では、まず、国立国会図書館のNDL-OPACで雑誌記事及び図書を検索し、資料収集を進めた。パソコンがあり、それを使用することができる人であれば、誰でも入手できる範囲の情報に限定したわけである。検索キーワードは、次のとおりである。①「異年齢」 and 「保育 or 幼児 or 幼稚園」、②「たてわり or 縦割 or タテ割」 and 「保育 or 幼児 or 幼稚園」、③「混合」 and 「保育 or 幼児 or 幼稚園」、④「異年齢児」。

なお、②の前半部分で3種類のキーワードをあげたのは、次の理由からである。1948年から1974年までの資料については、読みやキーワードが機械処理となっているため、漢字による検索が奨励されている。それに対して、縦割り保育の場合、「たてわ

岡山大学教育学部幼児教育講座 700 - 8530 岡山市津島中 3 - 1 - 1

Importance of Systematic Studies on Care and Education for Young Children of Various Ages

Tomoyoshi YOKOMATSU, Yasuo ADACHI*, Makoto ISE**, Shintaro NAGAHARA*** and Kaori INAMASU****

Department of Education for Infants, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

*Tachibana Ima Day-care Center, 3-2-9 Ima, Okayama, 700-9575

**Shirayuri Day-care Center, 321-1 Karakawaichiba, Okayama, 701-1214

***Non-Affiliated

****The Tadotsu Town Toyohara Kindergarten, 835-1 Kazuwara, Tadotsu, Nakatado, Kagawa, 764-0028

り」や「縦割り」や「縦割」や「タテ割」といった表現が用いられている。そうしたことから前記3種類のキーワードをあげた。

最終検索を行ったのは、2006年2月27日から28日にかけてである。そこから得た資料情報の中から、保育所と幼稚園における就学前児（6歳児まで）を対象にした保育に関するものに範囲を限定した。したがって、小学校児童との交流に関する資料や7歳児まで入園可能な外国の保育に関する資料や地域子育て支援センター等で行われる子育て支援を手助けすることを主目的とした資料は、この度は対象外とした。また、統合保育という意味で混合保育という用語が用いられている場合も、この度は対象から外した。その結果、該当収集資料は42件となった。後記「引用・参考文献」中の辞典・事典・用語集、中央教育審議会（1998）、時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方に関する調査研究協力者会議（1997）、厚生省児童家庭局（1999）、文部科学省（2002）、笹部（2006）以外がそれらである。なお、嶋（1999）は、現代と保育編集部（1999）内のものであるが、引用文献として明示するためにあげている。

該当資料を概観すると、近年の異年齢保育への関心の高まりにもかかわらず、異年齢保育に関する先行研究や先行実践の整理を行っているものはほとんどなく、行われている整理も不十分であるといえる。実践研究の場合、園の保育実践上の必要性から生じてくるので、先行研究はあまり必要ないという考え方もあるが、そうした考え方は適切ではないと考えられる。現実に同じ結論に到達している例は珍しくなく、異年齢保育がこれからますます重視されると予想されるので、その成果を整理し、蓄積されたものを有効に活用することが重要であると考えられる。そうした中で注目されるのが、宮里（2001）と坪井・山口（2005）である。

宮里（2001）は、様々な事例と自らの経験に基づき、異年齢保育を大きく二つに分けている。一つは、「同年齢でクラス編成ができるけれど異年齢で保育する『理想的異年齢保育』」であり、もう一つは、「同年齢ではクラス編成不可能な『条件的異年齢保育』」である。さらに、条件的異年齢保育には、3歳以上児クラスを中心に見てみると三つの段階が見られるという。第1段階は「三・四・五歳での年齢別クラス編成が不可能になり『同年齢・異年齢の二クラス編成』の段階」であり、第2段階は「『三・四・五歳異年齢の二クラス編成』の段階」であり、第3段階は「『三・四・五歳異年齢編成一クラス』の段階」である。その上で、諸事例をあげながら、

異年齢保育実践の課題を整理している。ただし、先行の研究論文や実践報告の整理とそれらとの関係についての記述はない。坪井・山口（2005）は、大信寺二葉保育園での2年間の実践記録を基に、異年齢保育の持つ意味や影響について考察している。その際、34件の先行研究論文や先行実践報告も引用することで、考察を深めている。ただし、収集資料は、3件以外は2000年以降のものであり、近年のものである。また、概念の整理は行われておらず、方法についての分析・考察も概説レベルといつてよい。

収集図書の中で最新の高橋・藤戸（2002）と菅野・菅野・菅野（2003）と荒井・福岡（2003）は、問題提起・提案・アイデア紹介といった形で作成されている。

これらのことを考えると、異年齢保育に関する体系的な研究は、これからであり、今まに行われる必要のある段階に来ているのではないかと考えられる。

以上のことから、本稿では、異年齢保育の体系的な研究を行うための第一歩として、用語使用に関する提案と、先行研究論文・先行実践報告において異年齢保育を対象にしている理由についての分析と、異年齢保育に関する体系的な研究の今日的意義に関する考察及び研究展望を行うことにする。

なお、本稿における検索キーワードの確定や後記「1」においては、現在入手している辞典・事典・用語集も活用する。また、該当資料が取り上げている文献の中で本稿に直接関係あるものについては参照し、後記「引用・参考文献」中にあげた。さらにまた、本稿後記「3」の研究展望の部分においては、筆者らと共通の問題意識を持って卒業研究として一つの試みを行った笹部（2006）についても述べる。

1. これからの用語使用に関する提案

異年齢の乳幼児たちを対象にする保育については、いくつかの用語が用いられている。また、同じ用語が異なった意味で用いられる場合がある。用語・概念が一定しないと、当然、先行実践・研究の整理とその到達点の明確化は困難になると考えられる。そこで、この項では、これまでの異年齢保育実践・研究の蓄積が整理され、より有効に活用されることを目指して、用語使用に関する提案を行う。

まず、現在入手している辞典・事典・用語集での各用語の諸概念を分析する。用語の範囲は、異年齢の乳幼児たちの保育を直接指すものに限定する。一般に同一年齢のクラスを解体して行う保育を指す「解体保育」は、ここでは注目しない。

入手資料の発行年代を概観すると、1970年代後半から1980年代半ばまでと1999年以降に分けるこ

とができる。これらの二つの時期では、用語使用に関して若干の変化があると考えられる。この点にも注目して、分析する。

1980年発行の『幼児保育学辞典』では、阪本(1980)が、縦割り保育について次のように述べている。「明確な意図を持って異年齢の幼児集団を構成し保育を行なうこと。たんに園児数や職員数、施設等の制約で異年齢の幼児を同一クラスで指導する混合保育とは区別されている。この縦割保育の目的は、自然発生的な子どもたちの遊び集団がもっていた異年齢児相互の教育機能を、保育活動にも生かそうとすることである。」また、村山(1980)は、「混合保育」について次のように述べている。「①異なった年齢の幼児を、やむを得ず一緒に保育すること。…縦割(たてわり)保育が積極的に行なわれるのに対して、やむを得ず行なうばあいにこのことばを使うことが多い。」「②一つの学校(組)に一つの年齢というわくを取払い、異なった年齢の幼児を意図的に混ぜて保育すること。縦割保育。解体保育。」その他、「③」として、今日の「統合保育」のことを、初期には「混合保育」といっていたとも述べている。この辞典では、縦割り保育は、宮里(2001)のいう「理念的異年齢保育」にほぼ対応する用語であり、「混合保育」は、多くの場合、宮里(2001)のいう「条件的異年齢保育」にほぼ対応する用語であるといえる。なお、この辞典では、「異年齢保育」とか「異年齢児保育」という項目は存在しない。

1983年発行の『保育学大事典 第2巻』では、秋山(1983a)が、「縦割り保育」について次のように述べている。「縦割り保育は、できるだけ広範囲の異年齢の子どもを一つのグループ、あるいは、一つのまとまりとして活動させることによって、年齢の異なる成員相互の間に、同年齢集団の成員間に起きるものとは異なった保育効果を期待して行われる保育である」。この事典でも、「縦割り保育」は、宮里(2001)のいう「理念的異年齢保育」にほぼ対応する用語である。なお、この事典は、第1巻から第3巻までであるが、どの巻にも、「混合保育」とか「異年齢保育」とか「異年齢児保育」とかいう用語を含んだ項目は存在しない。

1985年発行の『乳幼児発達事典』では、舟木(1985b)が、縦割り保育について次のように述べている。「たてわり保育」とは「異年齢の幼児を一緒にした保育のこと」。また、舟木(1985a)は、「混合保育」について次のように述べている。「異年齢の幼児を混合して、学級(組)を組織し行なう保育のこと。」「混合保育は、幼児数が少ないなどのやむを得ない場合に行なうことが多いが、ときに、それ

とは別の理由(建物・施設設備・教育的意図など)で行なうこともある。なお、混合保育が、思わぬ効果をあらわすこともあるが、もともと混合保育は、積極的な意図を持たない場合が多い。」この事典でも、縦割り保育と混合保育は、宮里(2001)のいう二つの用語にほぼ対応すると考えることができる。なお、この事典でも、「異年齢保育」とか「異年齢児保育」という項目は存在しない。

これらの1980年代の半ばまでに発行の辞典・事典においては、「異年齢保育」とか「異年齢児保育」という項目はなく、また、入手資料の題名にこれらの用語を用いているものも存在しない。それに対して、1999年以降発行の資料においては、題名中に「異年齢保育」という用語を用いるものが増え、「異年齢児保育」も見られる。

2004年発行の『保育用語辞典 第3版』でも、「異年齢保育」という項目がある。ただし、「縦割り保育」と同じ概念で用いられている。田代(2004c)は、縦割り保育について次のように述べている。「年齢別のクラスごとの保育に対して、異年齢の子どもたちを一つのグループ、あるいは1つのまとまりとして活動を展開させることを目的とした保育で、解体保育の一種である。それによって同年齢集団とは違った保育の成果をあげることができる。」また、田代(2004b)は、混合保育について次のように述べている。「縦割り保育・異年齢保育と同様に、異年齢によるクラス編成を行う保育である。しかし縦割り保育・異年齢保育の場合は、年齢の異なる子どもたちの相互的なかわりに積極的な意味を見いだしてそのような形態をとっているのに対して、混合保育の場合は、むしろ子どもの数、保育者の数、保育室の数など園の都合によって異年齢のクラス編成を行っている。」この辞典では、「異年齢保育」と「縦割り保育」は、宮里(2001)のいう「理念的異年齢保育」にほぼ対応する用語であり、「混合保育」は、宮里(2001)のいう「条件的異年齢保育」にほぼ対応する用語であるといえる。

ここで注目したいのは、「異年齢保育」という用語である。2004年発行の『保育用語辞典 第3版』では、「異年齢保育」については、異年齢児の相互のかかわりに積極的な意味を見いだしている用語として解説されている。この点に関連して、宮里も「条件的異年齢保育」の理論を積極的に構築しようとし、次のように述べている。「『条件的異年齢保育』は、理念的異年齢保育に学びながら、それをこえた新しい異年齢保育論が求められているのだと思います。」(宮里 2001 p.87)さらに、藤森(2000)は、「異年齢児保育」として、3歳以上の子どもたちを

3人の保育者で見る形態にし、複数の「習熟度別」活動内容や「提案」活動内容や活動内容「順序」から子どもたちが「選択」する保育を提唱している。この保育は、異年齢児の相互作用に意義を見いだすというのではなく、「保育の個性化」を図ろうとするものである。つまり、今日において用いられている「異年齢保育」あるいは「異年齢児保育」という用語には、新しい保育論や保育実践を生み出そうとするようなかなり積極的な意味が含まれているのである。そして、その背景には、従来のやむを得ず実施する混合保育を積極的に実施するものへと変えていこうとする動向がある。例えば、嶋（1999）は、1970年代の異年齢保育へのかかわり方の変化について次のように述べている。「一九七三年ごろ、…保育需要は、〇歳児から三歳児くらいまでがとくに多く」、「市民の希望を少しでも受け入れようと、三歳児をたくさん入園させると、一クラス二十名、ときには二十二名を保育一人が保育せざるをえない時代でした。「保育母たちは、苦肉の策として、混合保育の形態をとることが多かったのです。「ちょうどそのころ、東久留米市では〇歳児保育が制度化され、続いて七六年に障害児保育が実施されるということがあり、科学的保育観にたった保育実践のあり方を問いはじめたときでもありました。」「そこで、しかたなくする混合保育では、どちらかの年齢に無理があるという判断から、もっと意図的な混合保育を、そして年齢別の保育も確立できるようにとはじめたのが、『異年齢たてわり保育』でした。」この段階で、嶋は、「混合保育」よりも「異年齢たてわり保育」という用語を用いている。そして、彼女は、次のように述べている。「いま私たちは、異年齢保育は、子どもたちが保育園で人との豊かなかかわりをつくり、自分らしさを発揮して生きる保育の土台となる暮らし方そのものである、というとらえ方ができるのではないかと考えています。」この嶋の記述は、やむを得ず行う「混合保育」が豊かな保育としての「異年齢保育」に発展していったことを示しているといえる。こうしたことも影響して、2004年発行の『保育用語辞典 第3版』でも、異年齢保育が、縦割り保育と同じ概念で、積極的に実施するものとしてとらえられているのではないかと考えられるのである。

以上のことから、異年齢の乳幼児たちを対象にする保育に関するこれからの用語使用について、次の提案をしたい。やむを得ずこの種の保育を行う場合でも、今日では、そこに新しい保育ないし保育論を創造しようとしている状況であると考えられる。したがって、この点を踏まえて、異年齢の乳幼児たち

を対象にする保育は、基本的に、積極的な意味を含めて、「異年齢保育」か「異年齢児保育」かの用語で総称する。そして、異年齢児の相互作用に教育的意義を見いだして異年齢保育を実施しているとき、「縦割り保育」という用語も用いる。また、宮里（2001）のいう「条件的異年齢保育」を消極的にやむを得ず実施している場合に限って、「混合保育」も用いる。なお、この用語は、基本的に、近年以前の資料を分析する際に多く用いられるであろう。ただし、この「混合保育」に関する資料についても、これからの異年齢保育を創造する上で活用していくものとして、積極的な意味を見いだしていきたい。

2. 先行研究論文・先行実践報告において異年齢保育を対象にしている理由について

異年齢保育を対象にする理由については、多くの場合、その必要性ないし教育的意義からである。例えば、地域の子ども集団がなくなり、その教育機能が失われたこと、年齢別クラス編成のできないこと、心の教育が重視されるようになったことなどから異年齢保育を取り入れたり、取り上げたりする。このことは、よく知られているところであろう。

それに対して、他のことへの関心から異年齢保育を取り上げていると考えられるものもある。その関心としては、モンテッソーリ教育への関心（正田 1977）や乳幼児の発達そのものへの関心（田中・田淵 1977, 越中・中村・前田 2003, 子安・服部・郷式 2000, 子安・郷式・服部 2003）やパソコンソフトへの子どもたちのかかわり方への関心（村上 2003）や保育における劇遊び導入の意義への関心（藤野・成田・世古・宮串 2004）があげられる。

これらの研究は、先行実践や先行研究を整理しようとしているものとして筆者らが注目した宮里（2001）でも、坪井・山口（2005）でも、取り上げられていない。異年齢保育に関する体系的な研究は、これからであり、異年齢保育をより豊かに実践していく上で、今後注目されると考えられる。

3. 異年齢保育に関する体系的研究の今日的意義とその展望について

近年に異年齢保育への関心が高まってきた背景として、保育・教育界における変化をあげることができる。

幼稚園教育の指導方法において、学級の枠を超えた柔軟な指導方法も求められるようになったことが、その一つの背景といえる。例えば、今井・生田（2002）は、時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方に関する調査研究協力者会議（1997）

「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について」の中に、このことに関する記述があることに注目している。なお、仲野・後藤（2002）は、保育所保育指針で異年齢児のかかわりがすでに重視されていることも、意識している。

光本・古川・久保・大瀬戸・中原（2000）は、中央教育審議会（1998）「幼児期からの心の教育の在り方について」答申において、異年齢集団での豊かな体験が奨励されている点を取り上げ、この点も意識して異年齢保育の方法について研究している。この中教審答申は、異年齢保育を推進する一つの背景になっていると考えられる。

つまり、異年齢保育は、保育・教育界において奨励され、また、推進する条件も整いつつあるとよい。その上で、さらに今井らは次のように主張する。「幼稚園設置基準をはじめとして法規の定めるところを踏まえつつも、それぞれの公的保育施設はすでに具体的な現実の中で、創意工夫をしながら縦割り保育の実践に柔軟な姿勢で取り組んでいる。それは『預かり保育』が幼稚園教育要領に『教育課程外の教育活動』として法的な規定を受ける以前に、それぞれの幼稚園において、現実が先行するかたちで取り組まれていたことと類似している。異年齢のクラス編成を制限している法規が、見直され検討されることが期待される。」（今井・生田 2002 p.32）

異年齢保育の現場からの必要性に加えて、条件整備的な事柄が保育・教育界で整う中で、注目すべき主張がなされている。坪井・山口は、異年齢保育に関して次のように述べている。「異質な人間やある意味では明らかな弱者との関わりが要求され、保育士自身も従来から行ってきた年齢別保育の方法では対応できない事が多く含まれている」。（坪井・山口 2005 p.9）こうした状況からは、様々な異なった子ども一人ひとりへのより丁寧なかかわりが必要となるであろう。前述の嶋（1999）も、障害児保育の実践に伴う保育思想の深まりと共に、異年齢保育の発展があったと振り返り、その深まりについて次のように述べている。「障害児保育は、私たちの子どもの見方を深めてくれました。これまで感覚的、情緒的レベルから、発達の科学に裏づけられて、一人ひとりの子どもの育ちを、ていねいに見ることが要求されてきたのです。」「そして、障害のある子どもを、全園の職員で育てていこうという保育のあり方は、園児一人ひとり、どの子にも必要なこととして広がり、…保育のあり方の意味を深めたのでした。」「これまでの延長線では保育はすすまないという認識に立たされたから」、「いま、『徹底して子どもの側に立つこと』や、『子どもは必ず育つという方向

性をもつ』という考え方を保育の基本にすえるようになった」。このように、障害児保育実践をとおして、保育の丁寧さや思想の質が向上した上で、「異年齢保育は、子どもたちが保育園で人との豊かなかかわりをつくり、自分らしさを発揮して生きる保育の土台となる暮らし方そのものである」というとらえ方に至っている。

これらのことを総合すると、異年齢保育には一人ひとりへの丁寧さがより要求され、そのことに対応する努力や保育思想の深まりをとおして、充実した異年齢保育が実現していくということではないか。つまり、異年齢保育を推進することには、保育の丁寧さと保育思想の深まりをもたらず要素が含まれているといえるのではないか。

さらに、宮里は、次のように主張する。「これまで日本の保育理論は、暗黙のうちに同年齢での保育論を前提にしてきました。しかし、少子化の進行でその前提条件が崩れ、異年齢での保育論の構築が大きな課題となりつつあります。」（宮里 2001 p.87）彼のこの主張は保育所保育を念頭になされたものであるが、この主張を実現していけば、今日の保育所と幼稚園の連携・一体化の動向の中で、幼稚園教育にも大きな影響を与えることになるであろう。そうすると、これから生じることは、まさに保育論研究の再構築ということになるのではないか。

また、荒井は、「子どもたちの園である保育園や幼稚園を」「“きょうだい”の持つ味わい」の感じられる場にしてはどうかと願い、「さまざまな年齢のバラエティーに富んだ子どもたちの人間関係」の中で「その子ならではのらしさ、すなわち“パーソナリティ”（人格—個性）を培っていくことでしょう」と考え、「アイデンティティ（identity）という心の営みをはぐくむことこそ、異年齢の子ども同士がおつきあいをすることにとっての何よりの意義だと考えます」と述べる。（荒井・福岡 2003 pp.6-7）乳幼児の異年齢集団の中で、何かができることにかかわることよりも、むしろその子自身の人間性を育てていこうとする姿勢とよいか。彼はさらに次のように言う。「日本の保育界において、このように考える姿勢が一般化していけば、それは人間論としての保育観がより深まることであり、私はそうあることを心から願っています。」（荒井・福岡 2003 pp.6-7）能力向上にかかわることよりもその子自身の人間性の育ちに力点を置いており、その子を一人の人間として育てていきたいという願いがここにはあると考えられる。

以上をまとめると、異年齢保育への関心の高まりは、保育現場の必要性とか、社会における条件整備

とか、異年齢保育そのものへの洞察の深まりとか、保育研究の再構築への志向性とかを背景に生じている。こうしたことを把握すると、前述の塩路・佐々木（2005）の「今後の幼保一体化総合施設においては、いずれにせよ0歳児から5歳児までが共に生活する形態が主流になる」という予想にも、かなりの説得力があるのではないか。

異年齢保育への関心の高まりにより、保育実践・保育研究に大きな転換がもたらされる可能性は十分にあり、保育界は、今その段階に来ているのではないか。そして、異年齢保育の体系的な研究は、この転換をより豊かなものにする上で、今重視しなければならないものであると考えられるのである。

ここにおいて、研究展望についていくつかの基本的考え方を述べる。

まず、方法論の構築を考える必要がある。先行研究や先行実践を整理し、これまでの成果を明らかにしていく必要がある。こうした試みとしては、例えば、笹部（2006）をあげることができる。彼女は、筆者らと関心を共有し、卒業論文において、新しい教育観に基づいて『幼稚園教育要領』が改訂された1989年から範囲を限定した上で、幼稚園・保育所での3歳児クラスから5歳児クラスまでの縦割り保育に関する資料を収集し、方法の分析と幼稚園への取り入れ方について考察を行っている。こうした研究を先行研究・先行実践全体において推進していくことが、これから求められると考える。

次に、発達研究や保育内容研究の一環として異年齢保育を対象にしている資料の活用の仕方についてである。異年齢保育に関する先行研究・先行実践についての整理が行われ、方法研究の到達点が明確になると、さらなる実践研究が必要となる。到達点をさらに高めていくわけである。その際、当然、発達研究や保育内容研究の一環として異年齢保育を対象にしている資料を活用していく必要がある。

さらに、歴史研究を推進する必要がある。前述したように、異年齢保育には保育研究そのものの転換をもたらす可能性が十分にあると考えられる。異年齢保育への関心はいつ頃から高まってきたのか。発行される資料の多い時期があるとすれば、なぜそのようなことが生じたのか。この点については、例えば、日本の経済状況が悪化し、過去の良いものを学び直そうとする時期に重なるという仮説を立てることができる。また、1と3における考察からは、歴史的観点から、今後の保育界の指針について提案することも可能であろう。一つ一つの保育実践について詳細に研究することは当然必要であるが、大局的に保育界を見ていくことも必要である。異年齢保育

への関心の高まりにより、保育実践・保育研究に転換が生じる時期に来ている可能性は十分にある。保育界の指針を説得力のあるより確かなものにするために、この種の研究は不可欠のものであると考えられるのである。

引用・参考文献

- 秋山和夫（1983a）「縦割り保育における保育者の役割」岡田正章・平井信義編集代表『保育学大事典 第2巻』第一法規，pp.246-247。
- 秋山和夫（1983b）「縦割り保育とは」岡田正章・平井信義編集代表『保育学大事典 第2巻』第一法規，pp.245-246。
- 青木倫子・風間節子・長谷川孝子・坂口やちよ・降旗美佳子・立浪澄子（2001）「伝播していく遊びの中にカリキュラムを探る～『お店屋さんごっこ』の展開と異年齢への活動の広がりを通して～」『季刊保育問題研究』190，pp.8-17。
- 荒井洌・福岡貞子編著（2003）『異年齢児の保育カリキュラム～たてわり保育の指導計画と実践例～』ひかりのくに。
- 荒井洌・小林幹夫編著（1987）『たてわり保育と活動ステーション』川島書店。
- 中央教育審議会（1998）「『幼児期からの心の教育の在り方について』答申 新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機—」『総合教育技術』53（12），pp.13-136。
- 越中康治・中村多見・前田健一（2003）「異年齢集団における幼児の社会的適応—月齢、語彙、社会的行動特徴、攻撃タイプ—」『広島大学心理学研究』3，pp.137-145。
- 藤森平司（2000）『たてわりではない異年齢児保育 21世紀型保育のススメ』世界文化社。
- 藤野友紀・成田美貴・世古由美・宮串尚江（2004）「保育における劇遊び導入の発達の意義—北大幼児園4，5歳児異年齢混合保育の実践記録をもとに—」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』93，pp.53-79。
- 藤岡教子（2004）「ベアーズづくりから始めてみて…～異年齢での集団づくり～」『季刊保育問題研究』206，pp.110-114。
- 舟木哲朗（1985a）「混合保育」黒田実郎監修『乳幼児発達事典』岩崎学術出版社，p.160。
- 舟木哲朗（1985b）「たてわり保育」黒田実郎監修『乳幼児発達事典』岩崎学術出版社，p.325。
- 現代と保育編集部編（1999）『異年齢保育』ひとなる書房。
- 橋本三枝子（2001）「幼稚園での延長保育のあり方，

- 現状と課題～異年齢保育の良さを生かした延長保育に取り組んで～』『季刊保育問題研究』188, pp.255-259.
- 今井弘雄 (1984) 『2～5歳 異年齢児・タテ割集団ゲーム集』黎明書房.
- 今井弘雄 (2002) 『2～5歳 異年齢児・タテ割集団ゲーム集』(新装版)黎明書房.
- 今井裕子・生田貞子 (2002) 「縦割り保育に関する事例研究」『富山大学教育実践総合センター紀要』3, pp.25-32.
- 井上一世 (2004) 「子どもの主体性を育む環境づくり～たてわりコーナー保育を通して～」『保育の友』52 (2), pp.19-22.
- 入江礼子・内藤知美・太田佐恵子・井上紀子・杉崎友紀・黒川愛・上田陽子・塩原紀子 (2003) 「異年齢交流を支えるティーム保育の検討—指導計画の変容を手がかりとして—」『鎌倉女子大学紀要』10, pp.1-9.
- 伊藤美佳 (2004) 「異年齢の中で育ってきたT君～本音でぶつかりあい認めてもらう中で気持ちを切り替える～」『季刊保育問題研究』205, pp.13-21.
- 伊藤シゲ子 (2005) 「異年齢保育の四季～生活をともにする異年齢集団の保育づくり～」『季刊保育問題研究』212, pp.211-214.
- 岩城富美子 (1979) 「いま幼稚園で一たてわり保育の試み—」『教育と医学』27 (9), pp.68-75.
- 時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方に関する調査研究協力者会議 (1997) 「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について—最終報告—」幼児保育研究会編 (1999) 『最新保育資料集 1999』ミネルヴァ書房, pp.139-151.
- 光本涼子・古川律子・久保節枝・大瀬戸愛・中原正博 (2000) 「異年齢児クラスにおける関わりの育成と発達の保障に関する研究」『広島女子大学子ども文化研究センター研究紀要』5, pp.91-103.
- 厚生省児童家庭局 (1999) 「保育所保育指針」幼児保育研究会編 (2006) 『最新保育資料集 2006』ミネルヴァ書房, pp.189-218.
- 子安増生・郷式徹・服部敬子 (2003) 「縦割り保育の幼稚園における『心の理論』および関連する能力の縦断的研究」『京都大学大学院教育学研究科紀要』49, pp.1-21.
- 子安増生・服部敬子・郷式徹 (2000) 『幼児が『心』に出会うとき 発達心理学から見た縦割り保育』有斐閣.
- 増山育子取材 (2003) 「保育・ゆめ・未来 田園のなかの幼保合同・異年齢保育実践 八幡市立有都幼稚園・有都保育園」『はらっぱ』235, pp.24-27.
- 宮里六郎 (2001) 「異年齢保育実践の課題と『保育計画』づくり」『季刊保育問題研究』190, pp.86-101.
- 村上涼 (2003) 「幼児は絵本型ソフトでどのように遊ぶか—縦割りを中心とした自由保育場面での観察を通して—」『江戸川短期大学紀要』18, pp.60-49.
- 村山貞雄 (1980) 「混合保育」村山貞雄監修『幼児保育学辞典』明治図書, pp.257-258.
- 文部科学省 (2002) 「幼稚園設置基準」幼児保育研究会編 (2003) 『最新保育資料集 2003』ミネルヴァ 書房, pp.39-40.
- 仲野悦子・後藤永子 (2002) 「異年齢児とのかかわり—いたわりと思いやりの心の育ち—」『保育学研究』40 (2), pp.72-80.
- 日本保育協会特別参考資料 (1975) 『混合保育の研究』日本児童福祉協会.
- 齊藤桂子・米山千恵・渡辺幸子編著 (2002) 『異年齢クラスの楽しい遊びと生活』明治図書.
- 阪本忠一 (1980) 「縦割保育」村山貞雄監修『幼児保育学辞典』明治図書, p.416.
- 笹部奈緒美 (2006) 「幼稚園における縦割り保育の取り入れ方に関する研究」『卒業論文 横松研究室 18年』横松友義研究室.
- 佐藤文子・荒川郁・三浦澄子 (1980) 「混合保育における幼児の友人関係の展開について」『秋田大学教育学部教育研究所研究所報』17, pp.144-158.
- 嶋さな江 (1999) 「自然な関係を大事にし、保育の裾野の生活を豊かに—しかたなくする異年齢保育から、豊かな人間関係を生み出す保育形態として—」現代と保育編集部編『異年齢保育』ひとなる書房, pp.10-12.
- 塩路晶子・佐々木弘子 (2005) 「異年齢交流の視点から見た乳幼児保育—0歳から6歳までの子どもの育ちを見通すために—」『鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編)』20, pp.103-111.
- 菅野健志監修 菅野陽子・菅野伴代 (2003) 『年齢混合学級編成による『幼稚園教育課程の作成と実践』』オーエスエー.
- 正田幸子 (1977) 「モンテッソーリ教育における縦割自由保育の仲間関係」『武庫川女子大学紀要教育学編』25, pp.21-29.
- 高橋美恵子・藤戸純子編著 (2002) 『コミュニケーションの力を育てる異年齢保育』エイデル研究所.
- 武井楨次・佐藤怜 (1980) 「混合保育の効果に関する

- る追跡研究—附小新入生の生活調査を手がかりにして—」『秋田大学教育学部教育研究所研究所報』17, pp.107-128.
- 田中國夫・田淵創 (1977) 「幼児のあそびの発達—異年齢集団における自由あそびの観察—」『関西学院大学社会学部紀要』35, pp.61-69.
- 田代和美 (2004a) 「異年齢保育」森上史朗・柏女靈峰編『保育用語辞典 第3版』ミネルヴァ書房, p.109.
- 田代和美 (2004b) 「混合保育」森上史朗・柏女靈峰編『保育用語辞典 第3版』ミネルヴァ書房, p.110.
- 田代和美 (2004c) 「縦割り保育」森上史朗・柏女靈峰編『保育用語辞典 第3版』ミネルヴァ書房, p.108-109.
- 天満類子・菊地成朋 (2004) 「幼児保育における『場』の環境形成に関する事例研究—モンテッソーリ教育を実践する幼稚園の記録—」『都市・建築学研究』6, pp.65-76.
- 坪井敏純・山口郁 (2005) 「異年齢保育の中の子どもたち」『鹿児島女子短期大学附属南九州地域科学研究所報』21, pp.1-10.
- 植田明 (1982) 「異年齢混合保育に関する研究 第1報—遊びコーナーにおける選択傾向を中心として—」『大阪教育大学紀要第V部門』30 (3), pp.267-283.
- 植田明・井形美代子 (1983) 「異年齢混合保育に関する研究 第2報—異年齢混合グループにおける遊びの選択傾向を中心として—」『大阪教育大学紀要第V部門』31 (2・3), pp.239-251.
- 植田明・井形美代子・赤崎節子・藤原和子 (1984) 「異年齢混合保育に関する研究 第3報—異年齢混合グループにおける3歳児の行動観察を中心として—」『大阪教育大学紀要第V部門』32 (2・3), pp.279-292.
- 脇信明・麻生啓一・伊藤由美子・原田美穂・無着下瑩子・堀尾知弘・甲斐由佳里・沖本薫・原美里・小林いつか (2005) 「異年齢保育における子どもの発達に関する考察—ひめやま幼稚園における実践をもとに—」『別府溝部学園短期大学紀要』25, pp.17-24.
- 山本朋子 (2003) 「二・三歳児混合クラスで過す二歳児達」『季刊保育問題研究』199, pp.116-119.
- 山本朋子 (2004) 「四・五歳児混合クラスによる描画活動—どの子どもも光輝けるように—」『季刊保育問題研究』206, pp.219-222.
- 山城明代・玉城真友美 (2005) 「各地の保育実践研究 ひびき合い, 育ち合い—異年齢交流保育から